

日本との縁

私は30年にわたって、韓国で日本文学を翻訳してきた。

朝井リヨウ、有川ひろ、糸井重里、絲山秋子、井上荒野、岩井俊二、小川糸、小川洋子、恩田陸、角田光代、角野栄子、川上未映子、貴志祐介、北野武、京極夏彦、桐野夏生、西加奈子、桜木紫乃、さくらももこ、柴田翔、谷川俊太郎、辻仁成、天童荒太、東野圭吾、益田ミリ、三浦しをん、村上春樹、村上龍、群ようこ、森絵都、柳美里、柚木麻子、ヨシタケシンスケ、吉田修一〔50音順〕などなど、数多くの日本作家の作品を300冊以上翻訳した。なかでも、村上春樹さんのエッセイと、小川糸さん、益田ミリさんの作品は、韓国で私が最も多く訳した。

小川糸さんは、『ライオンのおやつ』韓国語版の序文に「韓国では、日本で出版され

た私の作品のほとんどが翻訳されています。そして、そのほとんどを訳して下さっているのが、ナミさんです。ナミさん、本当に本当にありがとうございます！ ナミさんには、私の内臓の色や形まで知り尽くされているようでお恥ずかしい限りですが、ナミさんのおかげで、本当に多くの韓国の読者の方とのご縁をいただくことができました」と書いてくださったこともある（こちらこそありがとうございます。小川糸さんをはじめ、素晴らしい作品をご執筆くださった上記の作家のみなさま）。

ところが今回は逆に、私のエッセイが日本語で翻訳出版されるなんて。こんな日がやってくるとは夢にも思わなかった。ひよんなことから日本文学の翻訳を始め、ひよんなことから作家になった私に、なぜこんな驚くべきことが起こったのだろうか。この序文を書きながらきつかけをたどってみると、そこには高校2年生のときに図書館で読んだ三島由紀夫の小説『金閣寺』があった。日本の小説に初めて触れ、シックな文体にぞくりとしたことを今でもはつきりと覚えている。もしかしたら、未来を予告する前奏曲だと直感したことによる武者震いだったのかもしれない。当時の私は、その事実を知る由もなかったけれど。

中学生の頃から、大学では英語や国語を専攻しようと思っていた私は、何の躊躇もなく日本語に進路を変え、そこから日本との縁が始まった。

大学2年生のとき、初めて日本に行った。北海道で、子どもたちのために世界各国の大学生にホームステイ先を提供するというプログラムに参加したのである。私のホストファミリーだった「理容のざわ」の野沢さんは『NHKのど自慢』年末大会の受賞経験者で、その町（北海道岩内郡共和町）にやってきた留学生たちに千昌夫の「北国の春」を教えてくれた。北海道のことを思い出すと、今でもへ白樺 青空 南風くと口ずさんでしまう。振り返るたびに心があたたかくなる思い出だ。

大学卒業後、東京で日本語を学びながら、原宿と両国のぬいぐるみ屋でアルバイトをしたこともある。ドラマ『東京ラブストーリー』が大ヒットし、KANの「愛は勝つ」があちこちで流れていた年だ。翌年、韓国に戻って翻訳の仕事 시작했다。初めて訳した本は、星新一さんの『おせっかいな神々』だった。

ドラマ『29歳のクリスマス』の主題歌だったマライア・キャリーの「恋人たちのクリ

スマス」が街中に溢れかえっていた年、東京で働く韓国人男性と結婚した。新婚生活を始めた場所は三鷹だった。今でも三鷹という地名を聞くと、胸がときめく。たくさんの思い出が詰まった場所だ。三鷹図書館まで徒歩3分だったので、ほぼ毎日通っていた。市役所にも近く、妊娠中は三鷹市役所の母親学級に通った（ここで会った日本人の友達とは、今でも「1995母親学級」という名のLINEグループでつながっている）。1995年に娘の静河が生まれた。その後、韓国と日本を行ったり来たりする生活を送っていたが、浜崎あゆみの「Voyage」がヒットした年に離婚した。その後ソウルに定住し、母子家庭の大黒柱として翻訳の仕事にいつそう邁進することになった。同じ頃、小説版『29歳のクリスマス』の翻訳依頼が舞い込んできたのは不思議な偶然だった。

賢く元気にすくすく育った静河も、大学で日本語を専攻した。立教大学に1年間、交換留学生として在籍したこともある。このとき、かつて母のおなかにいた頃、同じ母親学級に通っていたという縁を持つ双子の葉山智美ちゃん・里美ちゃんと出会って仲良くなったのは、まるでドラマのような出来事だ。「静河ちゃんの日本の母」として、娘の留学中、物心両面でサポートしてくれた母親学級の友人、小澤文美さん、村上水奈子さん、葉山みゆきさんにあらためて感謝申し上げる。あつ、この本をお読みになるかどうかどう

かわかりませんが、2001年に仙台の立町小学校にいらっしやった大友先生！ たどたどしい日本語の静河にいつもやさしく親切に接してくださって、ありがとうございました。ドラマに登場するような立派な先生だったことを、今も私たち母娘は覚えています。

そして、韓日文化の掛け橋だと私を讃えてくれる長年の友人、渋木義夫さん・節子さん兄妹にもこの場を借りて御礼申し上げます。渋木家のご両親とのお付き合いも30年を超えました。いつまでもお元気に長生きなさってください。

最後に、いつも頼もしい友、岩波書店辞典編集部 of 奈良林愛ちゃん。愛ちゃんの素敵な文章のおかげでこの本がよりいっそう輝きました。ありがとう。メールをやりとりするなかで新しい韓国語表現を目にするたびに、ぼんぼん跳ねるスーパールミみたいに悦ぶところが本当にかわいいです。

数日前、静河が「お母さんの本が出たら、日本の書店に並んでるところを見に行こうよ！」と言った。想像するだけで泣けてくる。まだいつ日本に行けるかわからないけれ

ど、いつか、この本が置かれた棚の前で涙をぼろぼろ流す母娘がいたら、それはきっと、
私たちです。

2022年10月 ソウルにて

クオン・ナミ